

# 蛇神婚姻譚と芋麻の呪力―「天なるや」歌詞解釈試論

## 1. オホモノヌシの婚姻譚

荒川 理恵

昔話の類型分類上『蛇婿入り譚』と分類される説話群があり、それらは内容的に『水乞い型』と『芋環型』に大別されるが、『蛇婿入り―芋環型』といわれる説話は、おおよそ次の様な筋で構成されている。

「ある女のもとに通う未知の訪問者の着物に針に糸を付けて刺し、この導きの糸によってその正体を知ろうとするが、却って鉄の毒によってその訪問者を死に至らしめるといふモチーフの昔話。我が国に於いてはこの未知の訪問者の多くは蛇である」（関敬吾）

芋環型は更にその結末部の展開の相違によって、災いを払う為の節句行事の起源を語るものと、異類婚による家の系譜を語るものに分かれる。後者のような説話によって語られる異類婚の子孫は、平家物語における緒方三郎や信濃の小泉小太郎の様に、超人的能力を発揮したり、英雄視される人物となっており、朝鮮半島・中国大陸に残された王朝始祖伝承にも同種のものが見出される（注一）。

そしてこの種の説話に連なる日本神話として、真つ先に取り上げられるものは、『古事記』崇神天皇の条にある、オホモノヌシの神婚説話である（注二）。

この意富多多泥古といふ人を、神の子と知れる所以は、上にいへる活玉依毘売、それ容姿端正しかりき。ここ

に丈夫ありて、その形姿威儀時に比無きが夜半の時にたちまち来たり。かれ相感でて共婚して、供住めるほどに  
いまだ幾時もあるべし、その美人妊身みぬ。

ここに父母、その妊める事を怪みて、その女に問ひて曰く、「汝はおのづから妊めり。夫無きにかにかも妊  
める」と問ひしかば、答へて曰く、「麗美しき丈夫の、その姓名も知らぬが、夕ごとに來りて供住めるほどにお  
のづからに懷妊みぬ」といひき。ここを以ちてその父母、その人を知らむと欲ひて、その女に讒へつらくは、「  
赤土を床の前に散らし、巻子紡麻を針に貫きて、その衣の裾を刺せ」とをしへき。かれ教へしが如して、旦時に  
みれば、針をつけたる麻は、戸の鉤穴より控き通ひて出で、ただ遣れる麻は、三勾のみなりき。  
ここにすなはち鉤穴より出でし状を知りて、糸のまにまに尋ね行きしかば、美和山に至りて、神の社に留まり  
き。かれその神の子なりとは知りぬ。

かれその麻の三勾遣れるによりて、其地に名づけて美和といふなり。この意富多多泥古の命は、神の君、鴨の  
君が祖なり。

この『古事記』の説話では、オホモノヌシの姿は直接見られてはいないが、鍵穴から通り抜けていることが、蛇体を  
暗示すると解釈する説がある。そしてこの説話は、オホタタネコの出自を物語ると同時に、麻苧が三勾のこつていたこ  
とに因る、三輪の地の地名起源説話ともなっている。

いわゆる三輪山神話といわれるこの神婚譚には、『日本書紀』崇神紀に倭迹迹日百襲姫命が大物主神の妻となる類似  
の説話がある。箸墓の由来を語る説話でもあり、オホモノヌシは櫛箱の中で美しい小蛇となって姿を示す。また、『日  
本書紀』雄略七年七月条に、三諸岳の神の形を見たいとの天皇の仰せがあったとき、或伝として、此の山の神を大物主  
神というところあり、雷の様な音をたて「ヒカリヒロメク」「大蛇」であったという。

古事記の記述では、三輪の神が蛇体であると明言されてはいない。しかし、他の神話が語るように、三輪山の神は蛇  
体の神であり、糸、しかも麻糸の導きによつて、未知の訪問者の正体が明らかになっている。先に述べたような昔話の  
話型分類からすれば、「蛇婿入り一苧環型」ということになる。しかしここで問題としたいのは話型ではなく、(い  
みじくも分類指標とされている)苧環である。三輪山神話を始め、昔話に至るまで、未知の者の正体を探るには、ほと  
んど全てといって良いほど、麻糸を用いている。『肥前国風土記』松浦郡の条(注三)で弟姫子に通つた狭手彦によく

似た正体不明の者も、芋環によって正体を顕され、常陸国風土記逸文麻績条の伊福部岡の神も雉の尾に着けた麻の糸によって顕された。そこには、麻糸に対する、呪的な信仰が窺われるように思われる。

麻糸を繰る機織女によって正体を顕された蛇神は、三輪山の神であった。「麻の三勾遣れるによりて」その地を三輪と名づけたということは、それにより蛇体の神は、三輪と言う地に固着化され、同時にオホモノヌシの神名も、残された三輪の麻芋に象徴的に代替されたとも言える。『記』の記述に従えば、もともとオホモノヌシは、オホナムチの和魂（注四）であり、「海を照らして依り来る神」であり、「吾をは倭の青垣の東の山の上に斎まつれ」として、祭られた神であった。三輪の神という位置づけは、一種の名付けと言ひ換えることも出来よう。こうしたことからすると、芋環型説話成立の背後には、芋麻に八本質の顯しとでもいうべき呪力を見とめ、蛇神と麻糸を繰る機織女の神婚譚を伝承していくような、神話的思考が潜んでいるのではないだろうか。

そして、卑見によれば、この芋麻の呪力と神婚譚という観点からすると、次に取り上げるアジスキタカヒコネの古事記歌謡についても、新たな側面からの解釈が可能になると思われる。

## 2. アジスキタカヒコネの神謡

アジスキタカヒコネの神の神話は断片的であり、記紀神話の中にあつていささか遊離した印象を与える。

『古事記』はアジスキタカヒコネを、大國主の神と胸像の沖つ宮の多紀理毘売の命との間に生まれた神と伝える。奈良県御所市鴨神にある高鴨阿治須岐彦根命神社の祭神であり、「迦毛の大御神」という最高の敬称で呼ばれている。またその神格は、『出雲国風土記』高岸の郷・御津の郷の記事（注五）に見られる伝承などをもとに、スサノヲの神格と比較して、雷神とみなされている。また神名から神格を抽出すると、アチは美称、ヒコは男子の美称、ネは愛称の接尾語であることから、神格の中心はスキに求められ、農具の鋤を神体とする農耕神であり、蛇体をもつ雷神として信仰されていたと考えられている（注六）。

アジスキタカヒコネをめぐる諸問題は、既に先学によって様々な論点から論じられているが、筆者はこれを蛇体の雷神の神婚譚ととらえ、芋麻の呪力・麻糸を繰る機織女の呪力への信仰を手がかりとして考察していきたい。

『古事記』アジスキタカヒコネの歌謡

故、阿治志貴高日子根の神は、怠りて飛び去りましし時に、其のいろ妹高比売の命、其の御名を顯はさむと思ひき。故、歌ひしく、

阿米那流夜 於登多那婆多能 宇那賀世流 多麻能美須麻流 美須麻流邇 阿那陀麻波夜 美多邇 布多和多良須 阿治志貴多邇比古泥能 迦微曾

(天なるや 弟棚機の 項がせる 玉の御統 御統に 穴だまはや  
み谷 二渡らす 阿治志貴高日子根の 神そ)

この歌謡は、返し矢によって死んだアメワカヒコの弔いに訪れたアジスキタカヒコネが、アメワカヒコの親族に死者と誤認され、怒り、飛び去った後、その同母妹タカヒメが兄の名を明らかにしようとうたった歌とされる。  
この歌謡の解釈は様々になされているが、そこで共通して問題にされているのは、機織女の首にかかった玉の麗しさを賞揚する部分とアジスキタカヒコネの関係性が不明な点である。

たとえば西郷信綱氏は『古事記注釈』で、

かくて歌の構成は、まず機織り女の首にかけた玉のうるわしさに感嘆し、それを突如比喩に転じて高彦根が二谷に渡って輝いているさまを歌ったものである。(略)此の歌のアヂスキタカヒコネには雷神または蛇神の面影があるとも云われる。たしかに雷電の輝きのようでもあるし、谷を越える蛇体のようにも見受けられる。しかしアヂスキタカヒコネのことがなぜここでこうしてうたわれるかは、やはり腑に落ちぬものがある。(略)織女の玉を比喩としてタカヒコネに言及ぶのも、すんなりとは理解しにくい。

と述べている。

また、土橋寛氏は『古代歌謡全注釈古事記篇』で  
「『御統の穴玉』が『二渡る』というのは、首飾りが二重に首に巻いている意で、蛇体が『み谷二渡る』の比喩」としているが、単なる比喩としては、前半部は表現が独立しており、いささか唐突な感じを受ける。

また、何故に雷神の神格を賞揚するために、弟棚機が持ち出されるのか不明であらう。

としている。

この点を『小学館新編日本古典文学全集』は、

玉の輝きが谷を二つ渡っているの意で神の美しさの比喩的形容。この形容について、同神が雷神としての性格をもつことと結びつける説もある↓「その玉のように谷を二つも輝き渡る」

として、特に問題にしていない。また『小学館日本古典文学全集』は、

特に穴玉を詠嘆するのは、高日子根神の正体が穴と関係が深い蛇神（雷神）であることを示す。長大な蛇体が二つの谷にまたがっている姿を連想させる。雷光が二つの谷を照らすと解することもできる。↓「緒に続べくつた穴玉よ。その穴玉のように、谷二つをお渡りになる、阿治志貴高日子根神ですよ」

と解釈しているが、蛇神というアジスキタカヒコネの本質を「穴と関係が深い」という一点に集約してしまい、弟櫛機との関係性をなおざりにし、歌謡に込められた隠喩の多重性をないがしろにする感がある。

このほかにも、特にこの歌謡に問題を見出さない解釈は幾つか有るが、それらは大体『古事記伝』以来の解釈に則っているように見受けられる。

例えば、倉野憲司氏は『古事記全注釈』で、

七夕伝説の織女星とは無関係で、ただうら若い機織り女の意である。元来谷二つにも渡って光り輝く稲妻の美しさを賛嘆したもので（前文にあった「飛去」の語に注意）、阿遲志貴（鋤）の「神は雷神であること既述の通りである。↓記伝には「一首の意をとほしていれば、天なる愛しき機織り女の頸にかけたる、美麗玉の如くに、光り映えて、二谷まで照りわたる此神は、阿遲志貴神ぞと云るなり。」とある。大体これでよからう。

とされている。

櫛機女の頸に掛けた玉の賛美が、比喩として用いられていることは確かであろう。しかし単なる比喩解釈では、何故にそれがアジスキタカヒコネの賞揚に持ち出されてくるのか明らかにすることは出来ない。歌謡の表現に則して言えば前半を単なる比喩と見ないことが肝要なのである。古橋信孝氏は「一步踏み込んで、氏独自の「神語り（神謡）」から神話「への展開という観点から、「前半部は訪れてきた神が神女をほめることによって言い寄ったものの、後半はそれに対し神女が神を称えて応えたものと解することが出来る。つまり神婚（神語り）である（注七）」としている。

この点で折口信夫は夙に、

是はあちすぎたかひこねの神が水の神である処から、三谷を二渉りする程の長大なもの、つまり大蛇だと考へて歌った事で、是に亦水の神と関係の深い、「たなばたつめ」の話を持って来てある事によつて此神と「たなばた」との関係の深い事が察せられます（注八）。

と言っており、独特の情緒的な表現ながら示唆深い。これを具体的に神婚話として捉えたものとしては、大久保正氏の「アヂシキタカヒコネの神が蛇体の雷神の表象と考えられることは語釈でも触れたが、「弟棚機」すなわち機織女が現れるのも、水辺に棧敷を設けて機を織り、物の来訪を待った巫女の面影をもつもので、その神は水神で蛇身の神であつたと考えられる（ヤマタノオロチの物語も、元来は巫女と蛇身の婚姻に淵源するものであつた）。また、怒つて飛び去つたというのも雷神の形象である。

おそらく本来は、機織女に通つた蛇神（雷神）が正体を見破られて怒り昇天するという物語であつたものが、天若日子の葬礼の物語の中に採り入れられ、変形したものと考えられる（注九）。

という解釈がある。西宮一民氏が、「機織女に通つた蛇神（雷神）が正体を見破られて怒り、昇天する神婚説話」としているのも同様の着想である。

各氏とも、この歌謡の成立の背後に、蛇体の雷神と機織女の關係性を認めているが、更に言えば芋環型蛇婿入りの様な蛇神と機織女の神婚關係と、芋麻の呪力の観点から捉え直すことができるであらう（注一〇）。

大久保氏も、西宮氏も「雷神が正体を見破られて怒り昇天する」としているが、アジスキタカヒコネの神が「怒る」のは、アメワカヒコの遺族に死者と見誤られたためであり、同母妹のタカヒメが（注一一）アジスキタカヒコネの神名を頭さんとして詠うのである。そして、「飛去る」のは異界の者であることが明確になつたため、彼と我の世界が分断されたからである。

ここまで見てきたように、蛇体の雷神と結びつく麻の機織女の呪的本領が「本質を頭す」ということであるとするならば、アジスキタカヒコネの神名をタカヒメが頭すことの意味が明瞭になるであらう。すなわちその上の句は從來考えられていたような、単なる唐突な比喻表現でもなければ、もちろん、断層でもない。麻糸を操り、水辺で機を織りながら、蛇体の雷神の訪れを待つ女神であればこそ、アジスキタカヒコネの神名を賞揚し、自らの機織女としての呪的・神

話的關係性の中で斯様な歌を歌い得るのである。

絹とは反対に湿気が必要とする麻糸は、乾燥に弱い(注一二)。また、その製糸過程では大量の冷たい水が必要とする。水辺で機を織り、神の来訪を待つという、折口の幻想的な表現は、水底の機織女の伝承や七夕伝承から導き出されたものでは有ろうが、苧麻の呪力を司る機織女の本質を突いているといえよう。

### 3. 麻の呪力の残存

さて、先に述べたように、三輪山神婚譚は、昔話の話型分類に従えば、『蛇婿入り―苧環型』ということになる。蛇婿入り譚において、蛇体の雷神は機織女の許に通い神婚関係を結ぶが、苧麻の呪力によって神の姿を顕すと同時にその関係は破綻する。神の蛇神としての本質が露わになった時、離別が訪れる。

しかし、昔話の蛇婿入りでは、蛇神としての神聖性の有無によって、結末部に相違がある。蛇婿との子孫を残さない結末を語る昔話では、苧環によって異類の正体を明らかにした後、単に蛇婿との婚姻関係が破綻するだけではなく、蛇の子をおろし、女の命を全うするための節句行事・節句酒等の由来が語られており、蛇婿に対する態度がまったく異なっている。ここでは蛇婿入りという異類婚は、忌むべきものであり、その子供は排除されるべき存在となっている。この異類婚に対する態度の相違について、江守五夫氏は婚姻形態の歴史の変遷と民族学の観点から、神に連なる家系を語る三輪山神婚譚を歴史的により古い「婿入り式婚姻」(氏の用語規定では『一次的妻問婚姻』としている)、後者を「嫁入り婚」が一般化したあとの新しい説話として分類したうえで、三輪山神婚型説話には婿入り婚時代の「婚姻の持続」が希求されていた「心理的背景が反映されているものと考察している(注一三)。

私の関心事に沿って言い換えれば、最大の相違点は、三輪山神婚譚型では婚姻関係が成立し、歓迎され、神の子孫の系譜が描かれる事である。そしてかの神婚を肯定する理由としては、(江守五夫氏が言うように「(婿入り式)婚姻の持続が希求されていた」かどうかは不明であるが、)そこに神との婚姻によって得られる利益特質が有ると思われているからであろう。

三輪山神婚譚のように子孫を残す話型では、往々にしてその子孫が神裔として超人的資質をあらわし、何らかの偉業

を成すものとなる。△忌むべき異類婚△へと零落する以前、蛇神との△聖なる神婚関係△が畏敬の念をもってうけとめられていた頃、神裔は神の子孫の証として、体にその徴である鱗を留めたり、大力を以て名を轟かしている。

ここで話型分類から離れて、改めて雷神と麻の呪力の観点から見渡すと、麻の呪力の残存が見えて来る。時代はずっと下るが、『今昔物語集』巻第二十七「冷泉院水精人形被捕語第五」には、毎夜現われ人間に悪戯していた小さな老翁が、芋縄で捕縛され、その正体を「水の精」と名乗り、以後出現しなくなったという話がある。これなども、麻が未知の者の正体を明らかにし、異界との線引きをもする呪力を持っていたことの現われといえよう。

また『日本霊異記』にみる一連の道場法師譚も、注目すべき要素を含んでいる。元興寺の道場法師は雷神の申し子であり、その誕生時、「頭に蛇を纏ふこと二遍、首尾後に垂れて生ま」れ、長じて後は、小さな体ながら「百餘人して引く石」を使って利水するような大力を持っていた（注一四）。その孫娘もまた小さな体に似つかわぬ大力を持つて居り更に興味深いことに、麻を織ることに巧みであったといわれる。

霊異記中巻「力ある女の力比べを試みし縁 第四」では、道場法師の血をひく少女は、市場で悪行を働いていた、狐の子孫の美濃狐という大力の女を、葛で作った鞭で打ちのめして改心させる。しかも、美濃狐に再三誰何されてもそれには答えず、相手に二度と市場に現れないように誓わせる。また、霊異記中巻「力ある女の強力を示しし縁第二七」では、夫には美しい麻織りの着物をしつらえ愛情細やかに従う良き妻であったのだが、その麻の衣の素暗らしさが災いして、夫の上司とのいさかいが起き、「呉竹を捕り粉くこと練系の如し」と表現される大力を以て争い、上司をやり込めてしまう。そして、夫の家族は、妻の大力のために累が及ぶことを恐れ、離縁してしまう。そしてその後は、草津川のほとりで無礼をはたらいた船頭を五百人力で船ごと陸に引き上げて懲らしめたり、水辺に深い関わりを持っている。

この説話自体は、三輪山型でもなく、仏教説話集ならではの三宝への帰依を説く結語で締めくくられている。しかし大力や麻、水辺との深い関わりは、雷神との因縁に由来するものであり、「夫の力ある人は、もち繼ぎて世に絶えず。誠に知る。先の世に大力の因を殖えて、今に此の力を得たるなりけり」とも言っているように、雷神の子としての超人的資質が世世に受け継がれて行くものとし、雷神との聖婚から始まる系譜が有るとする信仰が背景に有ったことは想像に難くない。

以前発表した拙論において、アマテラスとスサノヲの関係を、『搜神記』の馬娘婚姻譚にまで遡る、蚕の女神と馬



の風雨雷神との聖婚関係として分析した（注一五）が、蛇体の雷神は蚕よりむしろ麻を筆頭とする植物繊維・草木布と関連を持っている。絹も麻も現代人の感覚からすれば同じ天然繊維であり、布に織るものであるが、その技術工程は全く異なり、それを伝承する集団の神話的思考・信仰体系は全く異なるであろう。更にいえばその蛇神は反体制的存在であり、最終的に王権によって服従させられる下位機能であり、こうしたありようからも、蛇体の雷神と麻の機織女の聖婚をめぐる説話群には、馬娘婚姻譚とは別の神話の系譜が有るのではないかと推察される。本稿では、主に蛇神婚姻譚と麻の呪力という面からの分析を試みたが、アジスキタカヒコネの神話も、西王母信仰、七夕儀礼や、天体神話などとの関わりから様々な検討が必要であり、研究を続けていきたい。

一 朝鮮咸鏡北道広積寺の伝説では、蜘蛛の化身である美女のもとに通ってきた男が、糸の導きによって、池の竜であることがわかる。そしてその子供は明の太祖となった。鳥居龍蔵「有史以前の日本 三輪山伝説」（『鳥居龍蔵全集 第一巻』、朝日新聞社）三二一―三頁

朝鮮咸鏡北道会寧附近の伝説では、大家の娘のもとに池の王である河瀬が通い来、同様にしてその正体が明らかになる。そしてこの娘から一人の男の子が生まれた。長じて大層水に泳ぐことが上手で、又非常に力が強かった。後移って今の奉天の地に居り、妻を娶って三人の男子を挙げたのであるが、その二番目の子がついに、満州の太祖となった。鳥居、前掲書三二―三四頁

『三國遺事』巻二後百濟の条では、男はミミズの化身となっているが、三輪山神話と同様のプロットであり、百濟王朝の始祖となっている。金思權訳『三國遺事』（六興出版）一七八頁

二 オホモノヌシの神格は、オホクニヌシの国作りの終盤において、幸魂・奇魂として顕現するなど、大和の東の地に有って、出雲系の神として述べられるなど、複雑な神格を示しているが、本論においては三輪山を神奈備とする蛇体の雷神である点から論じる。

三 『肥前国風土記』松浦郡の条、「大伴狹手彦の連、発船して任那に渡りし時、弟曰姫子、此に登りて、摺を用ちて振り招きさ。然して、弟姫子、狹手彦の連と分れて五日を経し後、人あり、夜毎に来て、婦と共に寝ね、曉に至れば早く帰りぬ。容止形貌は狹手彦に似たりき。婦、其を柱しと抱ひて、忍黙えあらず、ひそかに続麻を用ちて其の

人の欄に繋げ、麻の随に尋ね往きしに、此の峯の頭の沼の辺に到りて、寝たる蛇あり、身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の岸に臥せりき。云々」。

四 新撰姓氏録では、この三輪山神婚譚の男神を大国主とし、相手を三島瀆杭耳女玉櫛毘売とする。

五 『出雲国風土記』全訳注 萩原千鶴 講談社学術文庫

賀茂の神戸。郡家の東南三十四里。天の下造らしし大神命の御子、阿遲須枳高日子命、葛城の賀茂の杜に坐す。此の神の神戸なり。故、鴨と云ふ。神龜三年、字を賀茂と改む。即ち正倉あり。

高岸の郷。郡家の東北二里。天の下所造らしし大神の御子、阿遲須枳高日子命、甚く昼夜哭き坐しき。仍りて、其処に高屋造りて坐せき。即ち高椅を建てて登り降らせて、養し奉りき。故高崖と云ふ。神龜三年、字を高岸と改む。三津の郷。郡家の西南二十五里。大神大穴特命の御子、阿遲須伎高日子命、御須髪八握に生ふるまで、昼夜哭き坐して、辞通はざりき。尔の時、御祖の命、御子を船に乘せて、八十島を率巡りて、宇良加志給へども、猶哭くこと止まずありき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎ坐ししかば、則夜の夢に御子辞通ふと見坐しき。則ち覺めて問ひ給へば、尔の時、「御津」と申したまひき。尔の時、「何処を然云ふ」と問ひ給へば、即ち御祖の御前を立ち去り出で坐して、石川を度り、坂の上に至り留り、「是処ぞ」と申したまひき。尔の時、其の津の水活れ出でて、御身林浴み坐しき。故、国造、神吉事妻しに、朝廷に参向ふ時に、其の水活れ出でて、用ゐ初むる也。此に依りて、今も産む婦、彼の村の稻を食はず。若し食ふ者有らば、所生るる子曰に云ふ也。故、三津と云ふ。即ち正倉有り。

六 系譜の条ではスキ・歌謡ではスキとなり、仮名の甲乙類を異にしているため、色々な説が成されており、「スキ」か「シキ」かは神格について論じる上で軽視できないものでは有るが、諸説ともに結論としては蛇体の雷神であり、農耕神であるという点で一致しているので、ここでは表記上の差異を特に問題とはせず、アジスキタカヒコネの神名で統一して同一神として扱う。

七 古橋信孝「神謡（神語り）と神話―雷神神婚幻想をめぐって―」『古事記・王権と語り』有精堂、

八 『折口信夫全集』第一五卷「七夕祭りの話」一八一頁 中央公論社

九 大久保正『古事記歌謡』講談社学術文庫

一〇 タカヒメはアジスキタカヒコネの同母妹であり、その夫はアメワカヒコでは有るが、この神話自体、穀霊アメワカヒコの死と再生の物語の側面を持ち、アメワカヒコとアジスキタカヒコネは同一神とも捉え得るので、ここで神婚譚ととる上で特に問題にしない。

一一 日本書紀一書（第一）には、歌謡を詠ったのは喪に集った人々とも言うが、タカヒコに対するタカヒメの歌であることが重要である。

一二 後代の資料では有るが、『北越雪譜』には、糸が乾燥して切れるのを防ぐため、機屋に雪を入るとある。また「絹を織るには蚕の糸ゆゑ陽熱を好、布を織るには麻ゆゑ陰熱を好。さて絹は寒に用ひて温ならしめ、布は暑に用ひて冷かならしむ。是は天然の陰陽に属する所ならんか。」とあり、絹の属性と麻の属性との間に、対称性を見出している。また、竹内淳子『草木布Ⅱ』法政大学出版会によれば、考古学上の出土物としては、土器に残された圧痕だけではなく、水に浸かっていたが為に保存された状態で出土した麻の織物も見られているという。かように麻は水を好み必要とする。

一三 江守五夫『物語にみる婚姻と女性』『宇津保物語』その他『日本エディタースクール出版部』

一四 道場法師については、拙論「小子部スガル伝承における蚕神と雷神」『学習院大学 人文科学論集5』で触れたが、現在は『蛇体の』雷神であることを重視し、馬娘婚姻譚とは別の、麻糸を筆頭とする植物繊維を媒介として構成される神話の系譜を想定している。

一五 「『古事記』における養蚕起源神話―馬と蚕をめぐる―」『学習院大学上代文学研究第19号』及び前掲論文